

日本語学習者のための待遇表現学習支援システム

7F-8

PELA

小鶴 康浩 大深 悦子

日本アイ・ピー・エム株式会社

1. はじめに

近年、日本語を学ぶ外国人の数は急増している。一種のブームとも言える状況である。また、日本で生活する外国人の数も確実に増えてきている。

そのような状況のなかで、日本語教育のなかにコンピューターを取り入れる試みが多くの場所で行なわれている。CASTLE/J⁽⁴⁾やKANJI CARD(Tront Univ.)などは、そのよい例である。

現在筆者らは日本語を学ぶ外国人のための学習支援システムを構築しようとしている。本システムの目的は、日本語初級終了者程度の学習者を対象に、待遇表現の運用能力の習得を手助けすることにある。

2. 日本語の待遇表現

生活の手段として、外国語としての日本語を使う場合、日常生活やビジネスの場では敬語の使い方など待遇表現の用い方に気を使わなくてはならないことが多い。

ところが、外国人にとって待遇表現の使い分けは困難を感じる場合が多い。尊敬語・謙譲語・丁寧語などの直接的な複雑さもさることながら、場面に応じた使い分けはそれ以上に難しい。

日本語では、同じ内容を表現するのに聞き手と話し手との関係、会話が行なわれている場、話の内容によって、使われる語彙、表現方法が変化する。例えば、身内・身外、目上・目下といった意識が言葉の使い分けに大きく影響する。その習得を困難にしているのは文化の違いによるものが大きい。したがって、色々な尊敬表現・謙譲表現を知識としては知っていてもどの場面での程度丁寧な表現を使用すればよいのかを判断するのは難しい。

尊敬語、謙譲語などの語彙や表現上の方略のレベル付けを行ない、会話が行なわれる場所、会話の相手などの要因とそれらのレベルとの間の関係を記述できれば、場面・状況に応じた言葉の使い分けを示す事ができる。

3. アプローチ

まず、場面と相手に応じてどのような表現を使用しているか、といった社会言語学的アプローチが必要である。

筆者らは敬語行動に関する過去の研究成果¹⁾⁻³⁾を調査するとともに、アンケート等を通じて言語の使用される場面と使用される方略との関係を調べた。

アンケートは、話す相手と使用する語彙・表現との関係を中心に行ったが、その結果、相手が誰であるかが判っても表現を決定できない場合が多い事が分った。

会話の行なわれる場面や、話の内容がはっきりしないと表現を選択できないというクレームが多かった。

つまり、ある表現を選択する基準が、必ずしも聞き手と話し手との力関係だけではないということである。もちろん相手に対する敬意は、表現を決定する最大の要因であるが、会話が行なわれる場の改まり具合や、相手に与える負担の量なども大きな要因となっている。

また、ある表現を相手・場面に応じた表現に変形するルールを見出すためには、どのような単語、どのような表現方法により丁寧さを感じるか、またその程度はどれ位かといった語用論的アプローチが必要である。

これには、同じ内容で異なった表現を書いたカードを数十枚準備し、数人のインフォーマントに丁寧だと思ふ順番に並べかえを行う作業を行なってもらった。この結果、使われる語彙や表現に対する丁寧さの語感について個人差が非常に大きいということが分った。「～を拝借できますか」よりも「～を貸していただけないでしょうか」の方が丁寧であると感ずる人もいれば、またその逆もいる。その差は殊に世代間で大きなものがあつた。

したがって、全ての表現間の厳密な順位付けを行う事は不可能であり、意味がないといえる。したがって表現のグルーピングを行ない、「ぞんざい」「少し丁寧」「丁寧」「非常に丁寧」というようなかなり荒っぽい分類を行った。

4. 待遇表現選択のモデル

上述の結果を基に、待遇表現のレベルを決定する要素を次のように考えた(図1)。

まず、第1に重要視するのは相手と自分との社会的関係(力関係と考へても良い)である。これを、聞き手に対する敬意度とよぶ。相手が身内の人間か

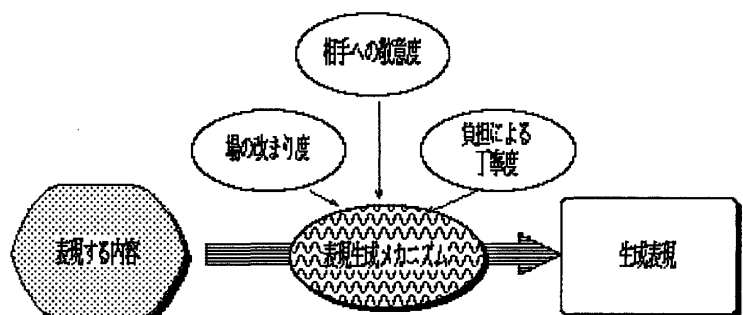


図1 待遇表現決定のモデル

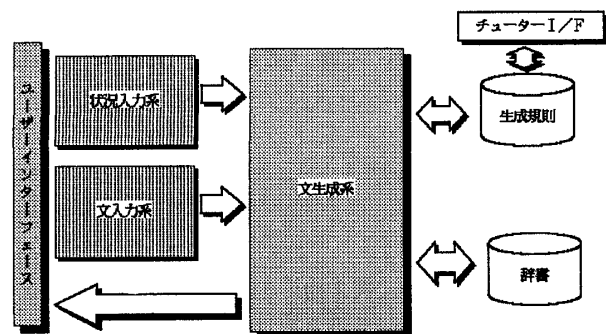


図2 PELA構成図

そうでないか、目上か目下か、男性か女性かなどこれを決定する要素は多い。

第2に、重要な要素として場の改まり度を考える。同じ相手に、同じ内容の話をする場合でも、公式の場で回りの注視がある場合とそうでない場合では、表現が異なってくる。場面の性格は、表現決定のために大きな役割を果している。

また、話の内容が相手に大きな負担をかける場合、理由を事細に述べたり、言い出しに気を使ったりという変化が見られる。これを、相手に与える負担による丁寧度とよぶ。

以上の3変数が表現を決定する主たる要因であるというモデルを構築した。3変数の値と意味付けを表1に示す。

5. システムの設計方針

システムの設計を行うにあたり、次の点を考慮して設計を行った。1) 待遇表現の学習を一通り終えてこのツールを使って自習を行う事を前提とする。2) MS-DOSパソコンでの実行を可能にする。3) インターフェースは少なくとも日英2カ国語対応とする。

6. システムの概要

本システムは、入力された会話が行なわれる場と聞き手から改まり度と敬意度を決定する状況入力系と、会話の内容及び相手に対する負担(丁寧度)を入力する文入力系、入力された情報から実際に文を生成する文生成系、学習者との会話画面を管理しシステムと学習者との対話を円滑にするユーザーインターフェース系からなる(図2)⁽¹⁰⁾。

今回の試作は、簡単のために機能をかなり絞りこんである。会話の内容は、待遇表現が最も問題となる依頼文に制限し⁽⁷⁾、第三者が話題に登らない場合に限定している。

7. 待遇表現の導出ルール

状況入力系が学習者に対し、会話の行なわれる場所や会話の相手などを質問し敬意度と改まり度を決定する。また、文入力系から会話の内容を入力する。その際相手に対する、負担の大きさも入力してもらい丁寧度を決定している。

表1 敬意度、改まり度、丁寧度の値

| | | |
|------|----|----------------|
| 敬意度 | -1 | 身内、動植物 <両親、花> |
| | 0 | 対等かつ親しい関係 <友人> |
| | 1 | 事務的な関係 <役所> |
| | 2 | 目上の扱い <上司> |
| | 3 | かなり目上の扱い <得意先> |
| 改まり度 | -1 | くだける |
| | 0 | 普通 |
| | 1 | 少し改まる |
| | 2 | 改まる |
| | 3 | 形式ばる |
| 丁寧度 | 0 | そんざい |
| | 1 | 少し丁寧 |
| | 2 | 丁寧 |
| | 3 | 非常に丁寧 |

表2 丁寧度と依頼文の型

| | |
|------|---|
| 丁寧度3 | : a 前ぶれ + <理由> + b 可能性 + c ほかし + (d ↑ 視点変換) e 依頼形式: Q(質問)[S(推量)+N(否定)] |
| 丁寧度2 | : a 前ぶれ + <理由> + c ほかし e 依頼形式: Q[S+(↑N)]/H(希望 -とありがたい, ↓-たい) |
| 丁寧度1 | : a' 軽い前ぶれ(あの一, すみません) e 依頼形式: Q[(↑N)]/H(-たい)/C(命令 -ください) |
| 丁寧度0 | : e 依頼形式: C(命令 -して, しろ) |

↑↓: この項目を使うと丁寧度が↑(上る) ↓(下がる)

このようにして決定されたパラメーターに応じて表現を導出する。導出の際のルールの一部を表2に挙げた。詳しくは文献10を参照されたい。

8. おわりに

今回の試作にあたり筑波大学留学生教育センターには多大なご協力を頂いた、ここに感謝の意を表する。また、本システムの設計にあたって、筑波大学日本語・日本文化学類の花村尚予氏にご協力を頂いた。合わせて謝意を表する。

参考文献

- 井出祥子, 荻野綱男 他: 日本人とアメリカ人の敬語行動, 南雲堂(1986).
- 国立国語研究所: 企業の敬語, 国立国語研究所報告73.
- 国立国語研究所: 敬語と敬語意識, 国立国語研究所報告11.
- 日本語教育研究支援システム研究班: パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発, 文部省科学研究費補助金試験研究報告書(1988).
- 南 不二男: 敬語, 岩波書店(1987).
- 村上 隆: 敬語規範のコンピュータ・シミュレーション, わが国における人間関係の比較的・総合的研究報告書, 名古屋大学教育学部, pp. 125-144(1984).
- Craig, Tracy, Spisak: THE DISCOURSE OF REQUESTS, Assessment of a Politeness Approach, Human Communication Research Vol. 12, No. 4, pp. 437-468(1986).
- Brown, Levinson: Politeness -Some universals in language usage, Cambridge Univ. Press(1987).
- 林四郎他編: 敬語講座, 明治書院(1974).
- 小鶴, 大深, 花村: 日本語学習者のための待遇表現学習支援システム, コンピュータと教育研究会資料5-4(1989).